

「底が突き抜けた」時代の歩き方 349

北朝鮮の拉致事件によって浮き彫りにされた

韓国人、日本人、在日それぞれの歪み

韓国で変革を求めた世代に圧倒的に支持されて、盧武鉉^{ノムヒョン}大統領が誕生した。世論調査では20代、30代の支持が60%に達した。在韓米軍の装甲車による二名の女子中学生死亡事故に対する無罪評決は大規模な反米デモを招き、より対等の対米関係を築く意思を表明している盧候補に有利に働いたものの、他方では、日本人以上に多数の韓国人が拉致されていることを明らかにした日本人拉致事件に対する金正日総書記の謝罪や、選挙直前には北朝鮮の核施設再稼働宣言、米国の北朝鮮ミサイル搭載船舶^{だほ}拿捕など安全保障での大事件が相次いだために、以前なら保守系の李会昌候補に有利になる筈だった。ところが、李候補の「韓米強調の強化」など従来型の「親米反北」路線に対し、「対等な韓米関係」と太陽政策の継続を打ち出した盧候補が僅差で勝つという異変が起こった。これが異変であるのは、米国からすれば、韓国を北朝鮮の侵略から守るために朝鮮戦争を戦い、それ以来、米軍が北からの攻撃に備えて韓国に駐屯してきたし、そしてベトナム戦争では、軍事援助の感謝の意を示して、韓国は米軍とともに戦うべく5万の兵力を送るというこれまでの背景があり、両国の紐帯は強力にみえてきたからだ。

選挙直前の世論調査では、「米国嫌い」は53%で、94年調査時の15%に比べて3倍を超えている。特に、有権者の半分を占める20代、30代の70%以上が「米国嫌い」である。半面、北朝鮮への好感度は「同族だ」という理由などで47%と、米国への好感度を10%上回り、韓国人の「反米親北」傾向が強まっていることがわかる。この傾向を反映して、盧大統領は「米国と北朝鮮が戦争を始めれば、われわれが止めてみせる」とまで豪語し、少なくともこれまでのように、韓国が米国と共に率先して北朝鮮と戦うことはないということを示唆した。朝鮮戦争を体験し、戦後の苦しみを味わってきている韓国の50代以上は、「米国好き」が「嫌い」の2倍以上であるが、しかしながら、過激な学生らが中心だった80年代の反米運動に較べて、今の反米デモは子供や主婦まで加わっている反米感情の広がりである。

今回の大統領選で、30歳代で80年代に大学生活を送った60年代生まれの「386世代」が世代交代のうねりを演出したことは間違いない。社会の各階層に進出して、新しい層をつくり始めているこの世代を中心とした変革の波について、朝日(02・12・21)の『天声人語』は次のように書いている。

《2、3年前に韓国で「変えろ」という歌が流行した。「みんな正気じゃない/みんな狂い始めている/誰が信じられる」といって始まり「すべてを変えろ、変えろ、変えろ」

と「変えろ」が何度も繰り返される（アン・ヨンヒ『シナプロ』小学館）。変化を望む若者の気持ちを代弁した歌だった。大統領選では「政治改革がキーワードだった」と語る韓国のある大学講師は「ゆるやかな左翼と呼べる広範な学生は盧候補を支持し、インターネットで活発な運動をした」「肩に力が入らず、官僚臭がない点が若者に受けた」と。一昨日から昨日にかけて、学生街は喜びにわいたらしい。新しい大統領は日本風といえば戦後生まれで、韓国風だとハングル世代である。世代交代の波に乗って、政治改革をどこまで進められるか。お手並み拝見である。》

「日本の60年代を思い起こさせる風景」と記すが、この熱気はいうまでもなく6月のW杯での狂乱に通じているだろう。テレビで見ている、あの民族感情の昂ぶりは凄まじいものであった。もちろん、その熱狂ぶりに羨ましさを感じることはなかったが、今から振り返ると、危惧に近い疎ましさを感じていた。それは、「大韓民国」を絶叫する赤い群衆は自国チームのプレイを応援しているだけで、相手チームの華麗なプレイなどを楽しむ余裕^{はな}から持ち合わせていなかったからである。第三国同士の試合でも観客席に陣取って「大韓民国」を叫ぶ^{きょうさく}あられもなさには、常に自国しか映っていない韓国人の視野狭^{きょうさく}窄が剥き出しにされていた。韓国の若い世代が求める変革の中心を南北統一の課題が占めていることは間違いない。南北分断が冷戦体制による非情な産物であることを考えると、南北統一の推進にとって最大の障害物となっている在韓米軍に対して若者たちが反米感情を大きく募らせることになるのは避けがたかった。

冷戦終結から十数年が経過しているにもかかわらず、依然として南北が分断されたままにある事態の象徴的な要因に米国の高圧的な対外政策を見出して、「反米」感情を募らしていくのは不可避であるとしても、その「反米」感情が「親北」感情と一体化している点に、W杯における熱狂と同質の韓国人の民族感情の歪みが露呈されておるように思われて仕方がない。反米運動の中心勢力になっているのは親・北朝鮮系の左派・進歩派の組織であるし、北朝鮮の宣伝放送なども米軍車両による女子中学生死亡事件に乗じて、「米軍殺人者に踏みにじられた民族の尊厳」といった激しい口調で、民族意識を刺激しながら韓国世論に向け、反米を煽っている。北朝鮮としては韓国内の反米運動を利用して米韓の間を引き裂くのに懸命で、韓国世論が米国の対北政策を牽制し、米国の足を引っ張ることを期待しているのだ。これらの傾向が対米関係悪化につながることを心配して、マスコミからの声やっと出始め、盧大統領も北朝鮮の核問題の深刻さを強調して、反米運動の自制を強く要請するほどであった。

産経新聞ソウル支局長の黒田勝弘が02・12・28付同紙に「テロ国家・北朝鮮」を相手にジョームズ・ボンドが活躍する「007」映画の最新作『ダイ・アナザー・デイ』が韓国での封切り（31日）を前に、非難的になっている小さな記事が報告されている。《「北を悪者にするのはケシカラン」「韓国を貧しい惨めな国に描いている」「北朝鮮の軍服が韓国軍の軍服になっているのはおかしい」などといって怒っているのだが、中には「ボンドのラブシーンの背景がお寺なのはけしからん」として仏教徒から批判声

明も出ている。

この映画は制作前から、出演依頼を受けた韓国の俳優が「南北和解ムードに水を差すような映画はイヤだ」といって断ったこともあって話題になっていた。そして最近の韓国社会の反米感情の高まりでいっそう民族感情を刺激され、若い世代を中心に反発が広がっているのだ。インターネットなどではボイコットや阻止をしきりに呼びかけている。

その議論に「北朝鮮をテロ国家というのはケシカラン」といった声まで出ているから驚く。この世代には金賢姫の大韓航空機爆破テロ事件などきれいさっぱりと忘れられており、まして日本人拉致事件など関心外である。日韓友好と相互理解のために、今や日本側から北朝鮮の実態を教えてあげなければならない時代になった。》

このコラムを一読してすぐに思い出すのは、アジア大会で北朝鮮が派遣した美女軍団に熱を上げ、浮かれてにぎやかに取り囲んだ韓国の若者たちの姿である。彼らなら、「北朝鮮をテロ国家というのはケシカラン」といいたしかねないようにみえる。「日本人拉致事件など関心外である」のは構わない。所詮、隣国での出来事にすぎないからだ。しかし、日本人拉致事件は韓国人拉致事件としても浮かび上がっている筈である。そしてその背景には、韓国人からすれば同胞である北朝鮮人の飢餓、貧困、個人的自由や基本的人権の抑圧など、金正日独裁の全体主義国家によってもたらされる、想像を絶するさまざまな問題が大きく横たわっている。韓国内には脱北者たちが数多く逃亡してきており、彼らの驚くべき証言に耳を貸そうとすればいつでも可能な機会に恵まれている。それなのに、北朝鮮への好感度が「同族だ」という理由で50%近くを占めているのは、W杯での度を越す熱狂ぶりにみられたように、彼らの民族感情にはやはり致命的な盲点が巣くっていることの例証ではないのか。

冷戦終結後十数年が経過しても、南北が分断されたままであるのは、《直接には金日成の「主体的」好戦性であり、コリアン自身である。それをいつまでも受身形でいつづけるところに「コリア民族主義」の宿命的な弱点がある。》と『中央公論』(02・5)で厳しく指摘するのは作家の関川夏央である。彼は日本人拉致事件に《韓国の道義的責任》を問うている。

《金大中大統領はノーベル平和賞を受賞しながら、北朝鮮の軍事独裁体制や対外テロ行為の継続、北朝鮮国内における人権侵害というより人間破壊ともいうべき行為には口を閉ざしつつづけている。まさに驚くべきことだ。》

韓国は民族主義を標榜してきた。いまもしている。同一民族はすべての同盟国に優先する、とか、コリアはひとつだ、とかいってきた。いまも声は低いが、そういつづけている。ならば北朝鮮の犯罪は民族の犯罪である。北朝鮮の病は韓国の病である。

北朝鮮はコリア文化に、東西冷戦という条件下に金日成という要素を加えて成立したのである。コリアという独特な風土の上に成長した独特な民族主義が超閉鎖空間で異常な自己増殖をとげ、ついに空想的侵略主義に至ったものである。このうちの過剰防衛型民族主義または自民族中心主義段階までなら、韓国もおなじではないかと私は考えるの

である。

少なくとも、北朝鮮を「わがことのように恥じ、憂う」センスなしの民族主義などあり得ない。同一民族が戦争状態でもないのに継続的に大量栄養失調死をとげ、大量の飢餓亡命者を出しつづけるような状態を放置する民族主義など、いうも愚かである。北朝鮮と北朝鮮人の現状を放置し、忘れていたいのなら、民族主義を捨てればよい。

だいたい、国内に「在日」のような「在韓外国人」集団を持たず、単一民族の同質性というところに不用意に安住しているから、現代でも民族主義を呑気に呼号していられるのである。病としての民族主義の相対化が強くもとめられる。》

関川夏央はそう指摘し、北朝鮮の《「革命妄想」と「民族主義」の犯罪を裁く》そのときには、韓国の「歴史認識」と「歴史への責任」も問われてくることを強調する。

更に彼は『中央公論』(02・11)でも、日本人を「集団主義」と批評する韓国人の 코리아文化の根底にこそ、《集団への執着が強くひそんでいるのではないか》といて、《コンピュータでプログラムしてもこうまくはいくまいと思われるほど、一糸乱れぬ神速で動画や毛筆体の金日成主義の標語を表現する》北朝鮮の子供たちによる人文字と、W杯でみられたような「大韓民国」を口々に叫ぶ群衆の狂乱ぶりとを同質のものとして重ねる。韓国の「親北」感情についても、《韓国には、北朝鮮を、信じがたいことだが、「左翼」だと評価する向きがある。韓国ではいまだ左翼の地位は高いのである。そのうえ、金日成は抗日勢力であり、自力で北部朝鮮を解放したのだという物語が韓国を縛っている。それは政権の「正当性」という物語になる。》といい、코리아の「井戸の中の民族主義」に対して、韓国は《自分の民族主義を相対化し(...) 国内と対日だけの狭くて深い井戸の中から出て、中国と、また世界と対峙し共存し》ていくためにも、《北朝鮮に対する正当な評価と正当な態度が必要》だと説く。

この指摘通りだとすれば、自力で南部朝鮮を解放したという物語を持たない韓国は北朝鮮に負い目を抱いていることになり、その負い目意識が自国民を窮状に晒しつづけている「北朝鮮に対する正当な評価と正当な態度」を曇らせているのだろう。したがって、韓国における「井戸の中の民族主義」とは、北朝鮮には負い目意識を、日本に対しては被害者意識を募らせてばかりいることによって、韓国自身を見通しのよい世界へと押し上げていくのを阻止する歪みをかたちづくっているといえるかもしれない。しかしながら、韓国から被害者意識を募らされている日本もまた、日本人拉致事件に関しては、9月17日の日朝首脳会談以前にも何度も北朝鮮による犯行と取り沙汰されたり、「よど号グループの元妻である八尾恵が有本恵子さん拉致に関する証言を行っていたにもかかわらず、マスコミにほとんど騒がれなかったし、まともに取り上げられることはなかったのに、日朝首脳会談で金正日が謝罪を表明してからは一転、お尻に火がついたかのようになり、日本中が沸騰するという歪みを露呈している。

評論家の山城むつみが『新潮』(02・12)で日朝平壤宣言の中の、《日本側は、過去の植民地支配によって、朝鮮の人々に多大の損害と苦痛を与えたという歴史の事実を

謙虚に受け止め、痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明した。》という一節が、《その是非も含め、ほとんど議論の対象にならずに、《新聞も報道番組も、日朝首脳会談後は、その問題は脇において、拉致問題べた一色で、もっぱら拉致被害者とその親族への共感に訴えて北朝鮮の非道と姑息さを非難し不信と疑惑を煽ることに終始した。》ことへの嫌悪感を記している。

《片方には過去のものとは言え「植民地支配によって、朝鮮の人々に多大の損害と苦痛を与えたという歴史の事実」がある、と。

そして、日本自身が北朝鮮に対してそれを認め「痛切な反省と心からのお詫びの気持ち」を表明したという現在の事実がある、と。

その是非はもちろん、その事実すら問題にせず、この問題を切り離れた上で、ただ心情に訴えて拉致問題ばかりを云々するのは、日朝正常化交渉を妨げ、宣言そのものを反故にしたい向きには好都合だろうが、それでは日本人として見たくないものは見ないまま見やすいことだけ見るということにはならないか、と。

それに、日朝平壤宣言に関して、拉致被害者とその親族の現前の悲しみとそこへの共感につけ込んで世論に訴えて宣言を反故にしようとするような姑息な手段を使わず、真正面から「歴史の事実」を問いそれに対する認識の是非を問うのが右派としての正論であるはずだろう、と。》

ここで付け加えておかななくてはならないのは、拉致問題は宣言の中にはっきりとは明文化されておらず、《日本国民の生命と安全にかかわる懸案問題については、朝鮮民主主義人民共和国側は、日朝が不正常な関係にある中で生じたこのような遺憾な問題が今後再び生じることがないように適切な措置をとることを確認した》と、ぼかされていることだ。「過去の植民地支配によって、朝鮮の人々に多大の損害と苦痛を与えたという歴史の事実」を明文化するなら、日本人拉致という現在の事実についても明文化すべきなのであり、日本側が過去の「歴史の事実を謙虚に受け止め、痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明」するなら、北朝鮮側も宣言の中に現在進行中の拉致問題の「事実を謙虚に受け止め、痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明」する必要があった。しかし、宣言では先にみたように、ぼかされたままであり、拉致問題は宣言の底に沈潜化させられていった。

もちろん、理由ははっきりしている。「日本側は、過去の植民地支配によって、朝鮮の人々に多大の損害と苦痛を与えたという歴史の事実」は、国交正常化後、両国が経済協力を行っていくという方向での解決が目指されているのに対して、日本人拉致問題のほうは宣言時点ではどんな具体策も話し合われてはおらず、とりあえず北朝鮮が「今後再び生じることがないように」確約したにとどまっていたからである。これまで拉致されてきた日本人は何名であり、そのうち生存者は何名でどのような状態にあるのか、といった拉致の全貌が明らかにされておらず、今後彼ら全員を日本に帰国させるのかという重要な点も北朝鮮側からは全く明らかにされない中で、8人死亡、5人生存の情報が伝

えられることによって、「8人死亡」の情報の衝撃が日朝首脳会談を覆ってしまったのだ。その衝撃が日本中の国民を初めて、北朝鮮が本当に日本人を拉致してきたという事実に向けさせることになったのである。

拉致問題に対するそれまでの冷淡とも思えるほどの日本人の無関心が一転して、新聞も報道番組も拉致問題べた一色で、W杯の興奮が再び甦ったかのような熱の帯びかたはいうまでもなく、ヘンという以外にない。それまでの無関心を反省して関心を持つようになったというよりも、依然として無関心のまま注目だけはしている感じがしてならないのだ。なぜなら、拉致問題を通して北朝鮮への嫌悪感が増長する一方で、拉致問題について考えることが広がり深まらずに、停滞しているからである。マスメディアのその後の北朝鮮残酷物語の氾濫はそのことを如実に物語っている。山城むつみはこの通信でも二度取り上げてきた金時鐘の10・4付産経新聞掲載の一文に触れて言及する。

金時鐘はこう断言していた。金正日は《「過去の清算」と対置して、努めて小さく位置付けているようだが、人間の尊厳や人命の重さからして、これは強弁というものであり、《第一に拉致事件は、過去の清算のなかで相殺される事柄では決してない。それは双方が誠意を持って、斟酌し、考慮すべきことであって、駆け引きの対象であっては絶対ならない。そのような認識での「謝罪」ではなく、《北朝鮮の国民こそ、このいきさつ的事实を知り、押し込められた隣人のとどこおった叫びに恥じ入ってこそ、謝罪だ。》《これは何も、北共和国側が謙らねばならない、と言っているのではない。金総書記が望むように、「両国関係が改善され、相互の信頼が醸成される」ためには、このような真摯な対応が私たち朝鮮人の側に求められているということだ。そのとき、身の置き場もなく悲嘆に暮れている拉致被害者たちの何百倍もの悲嘆が、朝鮮人の側に歴史的に滞っていることを、日本人自身が身をもって感じ取ってくれるだろう。(傍線山城)》

以上の金時鐘の文章を取り出して、山城むつみはもし仮に、「北朝鮮の国民こそ、このいきさつ的事实を知り、押し込められた隣人のとどこおった叫びに恥じ入るとすれば、そのとき、日本の国民こそ、身の置き場もなく悲嘆に暮れている拉致被害者たちの何百倍もの悲嘆が、朝鮮人の側に歴史的に滞っている」ことを「身をもって感じ」る用意があるか、と疑問を呈し、金時鐘の文章を日本人に向けて次のように裏返ししていく。

《「日本側は、過去の植民地支配によって、朝鮮の人々に多大の損害と苦痛を与えたという歴史の事実を謙虚に受け止め、痛切な反省と心からのおわびの気持ちを表明した」。日本の首相は北朝鮮の総書記に謝罪した。しかし、日本の国民こそ「このいきさつ的事实を知り、押し込められた隣人のとどこおった叫びに恥じ入ってこそ、謝罪だ」、「そのとき、身の置き場もなく悲嘆に暮れている拉致被害者たち」の「悲嘆」を朝鮮の人々自身が身をもって感じてくれるだろう、と。

また、こうも裏返って来る。

日本の人々は、今、「拉致という非情な国家暴力」と対置して「歴史の事実」を努め

て小さく位置付けてはいないか、と。

そうだとしたら、これもまた、「人間の尊厳や人命の重さからして」強弁というものではないか、と。

第一にこの「歴史の事実」は、拉致問題で相殺される事柄では決してない、と。

「それは双方が誠意を持って、斟酌し、考慮すべきことであって、駆け引きの対象であっては絶対ならない。そのような認識での『謝罪』が私には空しいのだ」と。

繰り返そう。こだわりなく読めば、力点は「それは双方が誠意をもって、斟酌し、考慮すべきことであって」（傍線山城）というところにある。北朝鮮の人々が一方的に謝り恥じ入れば済む問題ではない。

すでに述べたように、在日朝鮮人の金時鐘が北朝鮮の人々に恥じ入るべきだと言うその言葉には真があるが、同じ言葉を日本人が朝鮮の人々に向けて言うとき、そこに真はもはやない。逆に、日本人が、「歴史の事実」と「身の置き場もなく悲嘆に暮れている拉致被害者たちの何百倍もの悲嘆」の前に恥じ入ってこそ謝罪だ、と日本人自身に向けて言うことにこそ真があるだろう。》

彼は、こう言うことは《自虐でも謙りでもない》という。《金時鐘が、拉致の事実を知って、日本の拉致被害者たちの「とどこおった叫び」に恥じ入るべきだと言ったのは「北朝鮮の国民」に対してだった。その国の総書記一人に対してではなかった。》ように、《「過去の植民地支配によって、朝鮮の人々に多大の損害と苦痛を与えたという歴史の事実」を認め、「身の置き場もなく悲嘆に暮れている拉致被害者たちの何百倍もの悲嘆が、朝鮮人の側に歴史的に滞っていること」を、「身をもって感じ」取るべきなのは、日本国の一首相ではない、それをも含めた日本の人々自身である》。金正日や小泉純一郎に期待するのではなく、《朝鮮の人々が拉致の事実を知って日本の拉致被害者たちの「とどこおった叫び」に恥じ入れば入るほど、そして、日本の人々が「歴史の事実」を認め、「身の置き場もなく悲嘆に暮れている拉致被害者たちの何百倍もの悲嘆が、朝鮮人の側に歴史的に滞っていること」を、「身をもって感じ」取れば取るほど、日本国の首相ならびに朝鮮民主主義人民共和国の総書記が自分たちの考えと行いを変えなければならなくなるのであるはずだ。》

しかしながら、北朝鮮の人々自身が金正日独裁の囚われの身であるが故に、日本人拉致の事実を知ることはできない。したがって、「押し込められた隣人のとどこおった叫びに恥じ入」ることもできないから、「身をもって」の「謝罪」も不可能なのだ。そうすると、北朝鮮では「朝鮮の人々が拉致の事実を知って日本の拉致被害者たちの『とどこおった叫び』に恥じ入」ることによって、金正日も自分の「考えと行いを変えなければならなくなる」筈ということもありえなくなってくる。翻って、日本の人々の場合はどうなのか。山城むつみは《では、朝鮮の人々が拉致の事実を知るために何ができるのか。》と問い、《「日本という自由に物が言える国にいて、なにをおもんばかり、北共和国との在日のつながりを見過ごしてきたのだろう」という金時鐘の言葉に》耳をすま

せて、次のようにすぐさま日本人に向かわせる。

《他方、日本の人々が「歴史の事実」を認め、「身の置き場もなく悲嘆に暮れている拉致被害者たちの何百倍もの悲嘆が、朝鮮人の側に歴史的に滞っていること」を、身をもって感じ取るために何ができるのか。「自由に物が言える国」にいるにもかかわらず、日本の人々は、一体、なにをおもんばかり、「歴史の事実」を形の上でだけ認めて、その内実を見過ごそうとしてきたのだろう。》ここで、「自由に物が言える国」にいる日本人と、自由に物が言えない国にいる北朝鮮人とは、どこが、どれほど異なっているというのだろう。思考や行動の不自由さの点では全く変わらないではないかと辛辣に問われているのだ。もちろん、自由に物が言えない国にいてなにもできない北朝鮮人と、「自由に物が言える国」にいながら「自由に物が言える」ことを行使しない日本人とは置かれている立場が全く異なる。にもかかわらず、拉致の事実を知ることができない北朝鮮人と、「歴史の事実」の内実を見過ごそうとする日本人とがそれぞれの壁の手前で同じように立ち尽くしているとするなら、「自由に物が言える」有り難さなんて、糞の役にも立たないではないか。

山城むつみは金時鐘の言葉に丁寧に耳をすませているけれども、金時鐘は北朝鮮の人々が拉致の事実を知ることと金正日独裁体制の存続とが相容れないことにまで思索を巡らしているようにはみえないし、尚も、《無惨なことだが、意を決した金総書記の国際社会へ向き直る契機に、拉致被害者たちの犠牲が宿ることを祈ってやまない。》と文章を締め括る彼の手付きの不安定さに在日自身の歪みが投影されているように思われてならない。作家の金石範は『世界』(02・12)で、関東大震災時の朝鮮人虐殺に触れて、《総体として日本にはどこか大きな道徳的な欠損があるのではないかと思うことがしばしばある。概して過去の事実に関心を閉じて忘れて、加害者性の故か、忘れたフリをしているところに虚偽が生まれ、その合理化のための開き直りの姿勢が生まれることになる。そしてこの場合、天皇制に由来するところの朝鮮人に対する虫けらを殺すが如き排外的差別意識がある。日本が未だに過去を清算できず、過去の歴史的事実とまともに向き合えぬのはそのためだろう。》と厳しく批判し、拉致問題を契機に日本中に広まる反北朝鮮キャンペーンについても、こう分析する。

《戦争の惨禍を経験した日本には、その「加害者」の立場の認識を十分に内在化できない他律性と、敗戦後の「被害者」意識を中和させてきた歴史認識の曖昧さがある。その曖昧さが、過去精算を曖昧にする。いつも「被害者」のほうでありたいのに、戦争責任、戦後処理とか、戦後ドイツの場合に比較されたりして、その加害者認識が内発性を欠いた他律的な自己抑圧になり、それが被害者意識と親和する。この認識と心情のアンバランスが、日本をつねに後ろめたさを伴う「鬱」状態にしてきたといえる。(中略)

この「被害者」意識とねじれ合った「加害者」意識が、拉致事件による「被害者」への立場の反転で、いまその足場を得たといえよう。そうして、「加害者」意識と重なって抑圧されてきた潜在的な「被害者」意識が、拉致事件にその恰好のはけ口を探したよ

うな具合に見える。一部日本人の「在日」に対する昨日とは違うメンタリティに支えられた暴力はその表現になるだろう。》

金石範の以上の批判や分析を日本人は甘んじて受けなくてはならないが、批判というものは相手に向かう以上に自分に向かうものでなければならない。彼もまた、金時鐘と同様に、金正日の謝罪に《足元の全体が崩れるような衝撃を受けた》と記し、《崩壊感というのは、われわれが在日として生き、朝鮮民族の一員としていま日本に生きている道義的根拠の喪失なのである。》と説明して、これまで「被害者」側でありつづけた在日が突然「加害者」側に立たされてしまった苦痛を率直に吐露する。しかし、金石範が在日を「被害者」から「加害者」へと反転する構図の中に置くことは、いうまでもなく彼自身が分析してきたように、日本人を「加害者」から「被害者」へと反転する構図の中に置くことと、ちょうど対をなしている。つまり、この構図の中に閉じこめられている限り、在日はいつまでたっても自立することはできないだろう。

彼が「朝鮮民族の一員としていま日本に生きている」在日でありつづけるなら、抑圧者である日本に過去の清算を求める道義的根拠を有する一方で、北朝鮮が犯した国家的犯罪をも確かに引き受けなくてはならない。だが、金正日が謝罪をしたことによって衝撃を受けたということは、金正日が謝罪をしなければ衝撃を受けなかったということである。前述したように、拉致問題は金正日の謝罪以前から明らかであったのに、その謝罪によってしかもたらされない在日の衝撃なるものも歪みであり、その歪みは在日の同胞が「帰国事業」によってどのような惨状を被り、北朝鮮国民が破壊されつづけている金正日独裁体制の北朝鮮がどのような国家であったのか、をこれまで真正面から問おうとしてこなかった歪みに結びつく。だから彼は、《70年代に「北」との国交正常化が成立し、連動して韓国とも敵対関係が解消していたなら、拉致事件も起こらなかったのではという思いが強い》などと都合のいい空想に耽ったり、この期に及んでも、《金正日総書記の屈辱を忍んで再生を期する苦渋の心中を察してともに前進する日本の場で道を開くことこそ、忠誠ではないか。》などと、啞然とするような言葉が口をついて出てくる。

「金正日総書記の屈辱」には、北朝鮮国民の日々の生活における人間としての屈辱は含まれていない。その屈辱はどこまでいっても最高権力者たる独裁者の屈辱以外のなものでもない。金正日の屈辱は彼が自ら招いたものではないのか。金石範が「朝鮮民族の一員」でありつづけるなら、独裁者の屈辱を忍ぶよりも北朝鮮同胞の日々の屈辱を忍ぶべきではないのか。東大教授の姜尚中は「帰国事業」で北に帰った在日について『世界』（02・12）でこう発言している。《そうした北へ帰還した在日韓国・朝鮮人の多くが強制連行や植民地支配にともなう「餓餓のムチ」で日本に流れて来ざるをえなかった人々でもあったことを思い出すと、二重の意味で悲劇的です。またそのなかには広島や長崎で被爆した体験を持つ人々も混じっていたはずです。私が思うに、もし日本政府や国民が、そうした旧在日韓国・朝鮮人と、いわゆる「日本人妻」の人権や境遇に関心を持ちつづけ、その人々の悲劇的な巡りあわせを少しでも是正すべく、公式・非公式の外

交チャンネルを生かしてきたならば、今度のような拉致事件がこんなにも長い間にわたって放置されずに済んだのではないのでしょうか。》

この発言の中にも、では在日は北へ帰った同胞たちについてどのような関心を持ちつづけ、「帰国事業」を奨励してきた朝鮮総連の責任を追及しつづけ、祖国北朝鮮の現実を変えつづけようとしてきたか、という観点は全く捨象されている。被害者感情の保護の穴蔵から抜け出た発言や行動を在日も迫られている筈であり、そうでなければいつまでたっても自立できないのではないか。この在日の自立に連なる在日の発言が『論座』（02・12）にみられる。金時鐘は悲嘆の底から、《引きずられず、後ろ髪ひかれず、自立した在日定住者として祖国の命運を分かちもつだけの、意志的な在日朝鮮人になることを迫っている。》という言葉で隆起させているし、作家の梁石日は、《これからの在日のアイデンティティーは、上から押しつけられるアイデンティティーではなく、自前のアイデンティティーを築いていくことがこれまで以上に求められる》とインタビューに答えている。

富山国際大学助教授の李順愛に至っては、《日本人と朝鮮人という二項対立的な問題設定の無意味さ》や、《人間の苦しみや哀しみを理解し対処するうえにおいて、同族であるか否かということは本質的な差違をついには刻まないという、あっけないほどの単純な事実》をストレートに提出して、《「民族」は真実を担保するにはいたらない枠組みであることを》認める。したがって、「民族」を超えたところで、彼女は拉致問題を契機に噴出した「憎しみが憎しみを呼ぶ不毛な連鎖」を断とうという在日からの正論に対して、《しかし、「不毛な連鎖」を言挙げするなら、これまで北朝鮮や総連みずからが日本や韓国にたいしてどうだったのかを省みたうえで言及するべきだろう。》し、《今日まで、北朝鮮に変化をうながすことにおいて、在日朝鮮人たちは無力であった。》と断言した上で、《かつて母国留学生として韓国で学んでいるとき、「北朝鮮スパイ」の嫌疑を受けて逮捕され19年の獄中生活をおくった徐勝》の『世界』（02.11）の文章を批判する。

立命館大学教授の徐勝は、「拉致」の事実を認め公式に謝罪をした金正日総書記の「率直」さにも驚かされた。かつて民族全体が最大の被害を被り、「謝罪」を受けるべき日本に対して、「謝罪」を表明した屈辱と無念はいかほどであったらうか。全く想像を絶する「率直」さである。しかし、その「率直」さは、かえってパンドラの箱を開けることになったのかもしれない》と書いていることに示されるように、どこを向いている人物かは明らかであるが、彼女は、徐勝が北朝鮮の《「非正常」は双方向的な視点から認識されねばならない》と述べていることに、《徐勝氏はこれまで北朝鮮について「双方向的」に語ってきたか》と鋭く問いかける。《本当でないことは本当でない言葉が実証する。》と先の金時鐘はいったが、拉致問題は被害者の立場でしか発想できなかった在日をその立場から解放し、「自立した在日定住者」の自覚を深めていく機運を醸成しつつある点で、日本人と在日双方にとってより好ましい転機をもたらしていくにちがいない。

2003年1月5日記